

担い手の高齢化が進んだ果樹産地の維持

県北農林事務所経営・普及部門

日立市中里地区では、昭和50年代後半からリンゴ、ブドウ等の観光果樹経営（27戸、5.2ha）が行われています。しかし、近年、担い手の高齢化と後継者不足が顕在化し、産地の維持が困難となっています。このため、市、JAと連携し、農作業をボランティアで支援する「サポーター制度」の活用推進を図っています。これにより、果樹農家の担い手の確保、リンゴの間伐と樹形改善の推進による病虫害防除や摘果などの作業性の改善、来客者増加のための観光果樹園のPRなど、果樹産地維持につながっています。

サポーター制度を活用した担い手が残れる環境づくり

サポーター制度は、導入後8年が経過します。平成29年度は、果樹農家10戸でサポーター40名が活動しました。また、果樹農家におけるサポーターの受入や営農活動を継続的に支援し、定年帰農等による担い手の確保を図りました。

サポーターの年間活動実績は、726回（平成27年度対比111%）でした。また、1戸で後継者がUターン就農しました。



リンゴ園で作業をするサポーターと果樹農家



ドローンを利用した間伐、樹形改善講習会

リンゴの間伐と樹形改善の推進

リンゴ（栽培農家22戸）では、病虫害防除・摘果などの作業性を改善するため、間伐と樹形改善を進めました。このため、ドローンを利用して間伐樹を判断する講習会（写真2）の開催や園地ごとの課題とその改善策をカルテ化して提供するなど、わかりやすく伝える活動に努めました。

10戸が間伐と樹形改善に取り組み、そのうち4戸では、病虫害防除・摘果などの作業性が改善しました。

観光果樹園を知ってもらうために

日立市民でも中里地区の観光果樹園を知らない人が多いことから、地元を知ってもらうための取組が必要でした。リンゴ狩りのシーズンである10月、11月にJR日立駅及び常陸多賀駅においてオリジナルロゴ入りグッズ（東農大の支援を受け作成）を準備し、無償配布を実施しました。

テレビ、新聞で報道されたこともあり、果樹農家1戸当たりの来客者数は10～20%増加しました。



JR日立駅前でリンゴの無償配布